

紅ミュージアム 通信

やっぱり犬が好き！ ～「動物」が語る江戸時代

[かわら版]

紅ミュージアム年間スケジュール
期間限定商品のご案内



「東都本町貳丁目ノ景」(部分)国輝画・当館所蔵
化粧水「江戸の水」を買い求めにやってきた
女性たちの足元に戯れる子犬。

やっぱり犬が好き！～「動物」が語る江戸時代

人も犬も集まる 江戸の町

江戸の町に溢れるものを表現した「伊勢屋稲荷に犬の糞」という言葉がある。これは幕末期の文献(『守貞漫稿』)に出てくるものだが、それより以前の江戸でもこの状況は確認できただろうから、むしろ幕末期にはすっかり定着していた言葉だったとみるべきだろう。伊勢屋の多さは越後屋をはじめとする伊勢出身商人の江戸の町における活躍を指し、稲荷は稲荷信仰の盛んだった名残として今日の東京でも随所に確認できる稲荷社をい、そして犬の糞は人口密集地、都市「江戸」に居ついた犬数の多さを物語る。

江戸のように人口が集中する都市部は、ヒトの生活が生み出す廃棄物、すなわち犬にとっての食料に溢れた餌場でもあった。そこでまた、犬によるヒト

への被害、たとえば通行人に吠えかかったり咬みついたりして負傷させることや、排泄物による汚物問題、また捨子が野犬に食われるなどという事例もしばしば見られた。これらの犬害は、徳川五代將軍綱吉の生類憐みの令で強調されがちな大愛護令によって犬数が増長した結果では決してなく、それ以前から都市部が抱えていた問題のひとつであった。

犬は町に、猫は家に

いままでこそペットとして飼われている犬は多いが、



捨てられた西瓜の残欠と草鞋の結び紐にじやれつ子犬。
高輪は東海道筋の旅立ちの見送り地点だった。
〔名所江戸百景 高輪うしまち〕広重画・国立国会図書館所蔵

前近代の日本では主を持たない犬のほうが圧倒的に多かった。これは先の政策で、綱吉が現在の中野・大久保につくらせた広大な犬小屋と、そこに収容された野良犬・捨て犬の数からも推察できる。元禄八年(二六九五)当時、中野の犬小屋は一六万坪、大久保のそれは二万五千坪に及び、収容された犬の頭数は中野だけでも八万余頭に達していた。その頃の江戸はすでに百万近い人口を有し、この一割弱に相当す

る数の主を持たない犬が存在していたことになる。のちの曲亭馬琴編『兎園小説』(文政八年・一八二五)

に「家のうらなる子犬と家に飼うたる猫」が、河豚料理の残飯を食べて毒にあり、七転八倒した話がある。飼い主がいて家付きの猫に対し、近隣町内に居ついていた主なしの犬の姿がこの一文から読み取ることができる。もちろんこれが当時の犬・猫のありかたのすべてだったとは言わないが(この点については後述)、犬が個の家ではなく町内というコミュニティ単位で生きるケースは少なくなかったのである。

狂犬病の流行と対策医療

昭和二五年(一九五〇)、狂犬病予防法が制定されたことで、予防策をはじめ発生した場合の措置、また発生拡大と蔓延の防止策が整えられた。しかしながらこれ以前は、人獣共通

の感染症である狂犬病によって命を落とす事例が珍しくなかった。

日本国内で最初に狂犬病が発症した時期は具体的にわかっていないが、江戸時代では享保・元文期以降に狂犬病の流行・拡大があった。享保一七年(七三二)、長崎から狂犬病の流行が始まり、またたく間に九州地方に伝播、さらに山陽道をつたって中国・近畿地方へ拡大、東海道から本州東部へ、同二〇年(七三五)には東北、津軽地方にまで到達した。流行の初発が長崎であったのは、鎖国体制の敷かれた当時、外国との交流が唯一認められていた当地を経由してもたらされた洋犬の存在があったことと大きく関係している。一七〜一九世紀にかけて、ヨーロッパ諸国をはじめ海外では狂犬病が猛威を振るっていた。動物間での伝播が人獣共通

感染の温床となったであろうことは想像に難くない。この流行・拡大に間を置かず、元文元年(七三六)

には狂犬病対策マニユアル書『狂犬咬傷治方』が、本草学者野呂元文によって刊行される。本書にいう狂犬病対策の第一は「咬まれないようにすること」。言われるまでもない当然のことだが、これ以上の対策がないのもまた事実である。江戸では狂犬のことを「病犬」とか「麻疹犬」などと呼ぶこともあったが、これらに咬まれないようにするためには狂犬の見分け方が重要となるわけで、元文は狂犬の特徴についても本書で詳細に述べている。このほか、咬まれた場合は速やかに傷口の血を出すこと、また杏仁(杏の種)をつぶして傷口にあてて火をつける、つまり灸であるが、これによって傷口の消毒と毒の広がりを抑えるという対策を載

せている。予防注射など
なかつた当時としては、
基本的かつ最もな治療
だったのだろう。

愛犬家による

愛犬のための本

本書以降も狂犬病対策
に触れた書物は幕末にか
けて刊行されているが、
そのうちのひとつ、大坂
の戯作者で商人でもあつ
た晁鐘成が書いた『犬狗
養畜伝』(天保期刊)は、愛
犬家による愛犬書である
と同時に「犬の病気を治
療する効果絶大の薬」を

宣伝するための拡売用冊
子(景品)という、ユニー
クな一冊だ。

江戸時代、多くの犬は
町に居つくものだったと
前述したが、將軍家や諸
大名家などの特定の家、
あるいは個人に飼育・管
理・愛玩されていた犬も
それなりにあった。現在
の東大阪市東豊浦町にあ
る梅龍山勤成院の境内に
は、野犬に咬み殺された
飼い犬「皓」のために鐘成
が建てた碑があり、碑文に
は「愛畜の狗」皓を失った

「堪えざる悲哀」が刻まれ
ている。

そんな鐘成が手掛けた
本書は、犬の病気や怪我
を負った際の療法、ノミ
やシラミなど犬に寄生す
る害虫の駆除方法、健康
管理上の食事の注意、犬
飼いとして大切な姿勢
等々、愛犬家必読の項目
が続く。一八世紀中期以
降、金魚や鼠、鳥、はては
虫まで、小動物を対象に
した飼育書が刊行される
ほどのペットブームが訪
れるが、本書は随所に動
物愛護精神が見て取れ、

この点は前近代の文献と
して貴重な例と言えるか
もしれない。鐘成曰く。犬
を意味なく打ったり叩い
たり、犬同士を闘わせたり、
病にかかった犬を山野
に捨てたりするなどあま
りに可哀相である、また
うっかり尻尾を踏んでし
まって犬に咬みつかれて
も、それは人間が悪いので
あつて犬の責任ではない。



犬に足を咬まれた蕎麦屋が武士の頭上に蕎麦をひっくり返してしまつた一幕を滑稽に描いた「道化」シリーズのひとつ。
「江戸名所道化盡湯島天神の台」広景画・国立国会図書館所蔵

本書中盤以降は狂犬に飲
ませる治療薬、さらに狂
犬に咬まれた場合の人間
用治療薬の宣伝が続き、
愛犬家への訴求を狙つた
鐘成の工夫と才智、強か
さに溢れたさすがの構成
となっている。



老犬に寄生する「犬バエ」対策。犬バエは煙草の脂(やに)を嫌うため、煙草の軸を編んだ首輪を愛犬につけてやる飼い主。
『犬狗養畜伝』より、国立国会図書館所蔵

「動物」が語る

江戸時代

江戸時代はいろんな動物
物がいた。身近な犬・猫に
はじまり、農耕や物資輸
送に不可欠な牛馬、幕府
への献上品や諸藩からの
注文に応じた貴重種の鳥
獣、見世物となつた象や

駱駝、虎、豹などの渡来
動物、食用に供された動
物、愛玩目的で飼育・改
良された種の動物など、
当時の人々が目にした
生き物は現代の動物園
さながらに多種多様だ。
また、本草学や博物学の
観点から動物を写生し、
解剖・研究し、記録する
ことが盛んに行なわれた
時代でもあり、ヒトと動物
との関わり方におけるひ
とつの転換期であつた。

さて、本稿では江戸時
代を知る重要な「資料」と
して犬を取り上げたが、
次はどんな動物から見
ていくとしようか。

※1「養老律令」や「医心方」など奈良より平安期の史料に狂犬病に冒された犬の存在をうかがわせる記述がある。

※2 長崎での初発を享保一八年(一七三三)とする史料もある。

※3 江戸時代以前より洋犬は権力者への献上品として日本にもたらされており、唐犬や南蛮犬と呼ばれた。寛文期に中国やオランダからもたらされた鳥獣を写生し記録した「唐蘭船持渡鳥獸之図」(慶應義塾図書館所蔵)には、グレイハウンドやポインター、スパンニエル、チワワなど、現代日本で人気の犬種が描かれている。

※4 このほか愛犬や愛猫の墓石の出土事例が藩邸跡やその菩提寺から確認されている。

◆紅ミュージアム年間スケジュール

| | | イベント | 休館日・閉館時間の変更等 |
|---------|------------------------|--|---|
| 2015年4月 | 25(土) | 「江戸の化粧再現講座」～基本の白粉化粧編～ 14:00～15:00 講師:当館学芸員 定員15名・参加費500円(紅染めの和菓子付き) | 6(月)、13(月)、20(月)、27(月) |
| | 5月 | | 7(木)振替、11(月)、18(月)、25(月) |
| | 6月 | | 1(月)、8(月)、15(月)、22(月)、29(月) |
| | 7月 18(土) 8/30(日) | 期間限定ミニ展示・「キスミーの香水」開催 | 6(月)、7(火)創業記念日、13(月)、 21(火)振替、27(月) |
| | 8月 | 夏休み特別講座「夏休み子ども自由研究 紅ってなあに」 ①10:30～12:00 ②14:30～16:00 講師:当館学芸員 定員各10名(親子2人1組で5組)・参加費無料 | 3(月)、10(月)、17(月)、24(月)、31(月) |
| | 9月 | 27(日) 「和のパーソナルカラー講座」 14:00～16:00 講師:吉田雪乃氏(伝統色彩士協会 伝統色彩士) 定員10名・参加費2,000円 | 7(月)、14(月)、24(木)振替、28(月) |
| | 10月 10(土)～ 24(土) | 企画展・「伊東深水が見た像 ^{リアル} —美の軌跡・素描—」開催 「江戸の化粧再現講座」～秋の外出時の化粧編～ 14:00～15:00 講師:当館学芸員 定員15名・参加費500円(紅染めの和菓子付き) | 1(木)～9(金)展示替えのため、 13(火)振替、19(月)、26(月) ※企画展開催中、毎週金曜日は20:00まで開館 |
| | 11月 | ～29(日) 企画展終了 | 2(月)、9(月)、16(月)、24(火)振替、 30(月)～展示替えのため |
| | 12月 | | ～4(金)展示替えのため、7(月)、14(月)、 21(月)、26(土)～31(木)年末のため |
| 2016年1月 | 9(土) 31(日) | 期間限定ミニ展示・(仮)「新春吉祥展」開催 | 1(金・祝)～4(月)年始のため、 12(火)振替、18(月)、25(月) |
| | 2月 | 6(土) 「江戸の化粧再現講座」～白粉化粧・比較編～ 14:00～15:00 講師:当館学芸員 定員15名・参加費500円(紅染めの和菓子付き) | 1(月)、8(月)、15(月)、22(月)、29(月) |
| | 3月 | | 7(月)、14(月)、22(火)振替、28(月) |

*都合により、内容の変更が生じる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
*臨時休館情報につきましては、当館HPをご確認ください。

Information

かわら版

期間限定商品のご案内

伊勢半本店では、3月31日まで「小町紅『手毬』」春季限定柄3種(各9,000円/税抜)を発売いたします。吉祥の象徴でもある梅を配した「幸梅(さちうめ)」に、華やかで愛らしいデザインの「桃花」と「唐花」。春に向けて新たな門出を祝う贈り物に最適の一品です。



小町紅『手毬』幸梅(9,000円/税抜)

Since 1825
伊勢半本店  ミュージアム

●開館時間/10:00～18:00 ●休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>